29p-C1-17

受動Qスイッチレーザー共振器内での 可飽和吸収体の透過率の時間的・空間的計測 In situ, Temporal and Spatial Observations of the Transmission of a Saturable Absorber in a Passively Q-Switched Laser 分子研^{O(PC)}常包 正樹、平等 拓範

Institute for Molecular Science(IMS) ^{°(PC)}Masaki Tsunekane, Takunori Taira

E-mail: tsune@ims.ac.jp

はじめに:受動 Q スイッチレーザーは近年、QCW 駆動することで小型高出力、高輝度、高安定なパルスギャッ プであるサブナノパルス光源として、加工、計測やテラヘルツ発生用励起光源、さらにはエンジン点火用と様々 な応用が広がっている。これまで多くの実験や解析が報告されているが、実際にレーザー共振器内での可飽和吸 収体の振る舞いを実験的に計測した例は少ない。今回 Nd:YAG/Cr:YAG 受動 Q スイッチレーザー内の Cr:YAG の 透過率を時間的・空間的に計測する試みを行った。

実験構成:図1 に実験構成を示す。端面励起された Nd:YAG 結晶励起端面と出力鏡で構成される Nd:YAG/Cr:YAG 共振器内に、Cr:YAG を挟むように2 つの偏光プリズムを挿入し、偏光の違いを利用して、 プローブ(CW Nd:YAG レーザー)光を共振器内の Cr:YAG に導入、取り出しを行い、高速ディテクター で透過率の時間的・空間的変化を観察した。Cr:YAG の初期透過率は60%、結晶面方位は[100]で、回転ステ ージを用いレーザー発振は[010]、プローブ光は[001]



図1 共振器内透過率計測実験系

方向に偏光入射させている。平面出力鏡の透過率は 50%、共振器長は 19cm、励起エネルギーは 16mJ、Q スイッ チパルス出力は 1.1mJ、パルス幅は 12ns であった。CW プローブ光のパワーは約 250mW である。プローブ光は レンズにより Cr:YAG 結晶内で直径 65µm に集光され、これが空間的な測定分解能となる。また、この集光レン ズを走査することで結晶内の集光位置を任意に移動でき、透過率の空間(2 次元)プロファイルを計測できる。 透過したプローブ光は高速ディテクターにより検出され、透過率及び透過率の時間変化を観測した。

解析方法と測定結果:測定で得られた時間信号より下記のような方法で透過率を計算した。Qスイッチ発振直後のCr:YAGの透過率Tは、

$$T = \exp\left[\left[-\sigma_{SA}\left\{n_{SAi} - n_{SA2}\exp\left(-\frac{t}{\tau}\right)\right\} - \sigma_{ESA}n_{SA2}\exp\left(-\frac{t}{\tau}\right)\right]l_{SA}\right]$$
(1)

ただし σ_{SA} 、 σ_{ESA} はそれぞれ Cr:YAG の基底準位、準安定準位の吸収断面積、 n_{SAi} 、 n_{SA2} はそれぞれ Cr⁴⁺:YAG の 全状態密度、準安定状態密度、 τ は準安定準位から基底準位に落ちるライフタイムである。変形すると最終的に、

$$\ln\left\{\ln\left(\frac{T}{T_0}\right)\right\} = -\frac{t}{\tau} + \ln\left\{\left(\sigma_{SA} - \sigma_{ESA}\right)n_{SA2}I_{SA}\right\}$$
(2)

ここで T₀は初期透過率である。右辺の時間微係数からライフタ イムτが、t=0の測定値から発振直後の透過率が求められる。 図 2 は発振直後の透過率分布の計測結果を示したグラフである。 Cr:YAG 内で同心円状になめらかに透過率が上昇している様子 が観測できた。レーザービームの中心にて、最大透過率は 76% と見積もられた。またライフタイムは透過率(場所)に依存せ ず、3.6µs と計算された。なお、Cr⁴⁺:YAG はサイトごとに吸収 の偏光依存性があることが知られており¹⁾、今回プローブ光の 偏光が、発振光の偏光に垂直であることから、これら測定結果 の解釈には多少注意が必要である。詳細は当日報告する。 参考文献:H.Eilers, et.al., Phys.Rev.B 49, 15505 (1994).



図 2 共振器内 Cr:YAG 透過率分布測定結果